

# CIFOR 公開フォーラム「次世代への森林」

池田俊彌\*<sup>1</sup>・桜井尚武\*<sup>2</sup>・加藤 隆\*<sup>1</sup>

CIFOR (国際林業研究センター) は去る 4 月 5～9 日, 東京で理事会を開催した。理事会がインドネシアの外で開かれたのは初めてであったが, これには最大のドナー国である日本を重視した考えがあったと思われる。CIFOR はこれを機会に, 日本の関係者と広く交流し, 相互理解を深める目的で, 4 月 10 日, 国連大学において「次世代への森林」と題した公開フォーラムを開催し, 日本からは外務省, 林野庁, 国連大学, 森林総合研究所が協力した。以下はその概要である。

## 1. 開会式

午前 10 時, 同時通訳のもと, 池田俊彌 森林総合研究所 海外研究協力官の司会で開会式が開始された。まず, CIFOR 所長の Dr. Jeffrey SAYER が開会の辞を述べ, フォーラム開催の意義, 特に森林・林業および環境の関係者との交流の意義を強調した。そして, CIFOR の活動を, 現在実行している 10 のプロジェクトの内容を説明する形で紹介した。

引き続き, 花谷卓司 外務省経済協力局 国際機構課長が挨拶し, 日本が CIFOR 設立当初より人的・財政的貢献を積極的に行ってきたこと, ODA 予算の削減は 2000 年まで続くが, CGIAR (国際農業研究協議グループ) への拠出金は 39 億 9,730 万円 (4.1%減), CIFOR へは前年度とほぼ同額の 2 億 1 千万円を予定していること, CIFOR の役割は重要で ODA に対する国民・納税者の理解を得るためには, 今回の公開フォーラム等を通じて CIFOR の活動が広く知られ, 国民の理解と支持を得られることが重要であると述べた。

開会式の最後は Wisber LOEIS 在日インドネシア大使の基調講演であった。

---

IKEDA, Toshiya, SAKURAI, Shobu & KATO, Takashi : CIFOR Public Forum on Forests for the Next Generation

\*<sup>1</sup> 森林総合研究所, \*<sup>2</sup> 林野庁研究普及課

大使は、これから人類が環境、特に森林と共に持続的に発展しつつ生きていかなければならないこと、どのような林業プログラムにも人間の要素が加味されねばならないこと、持続性を脅かす人口増、気候変動、土壌被害、生物多様性の低下、自然災害、程度の低い資源管理、不適当な投資、不適当な森林所有制度等に立ち向かわねばならないことを述べ、Chris MASER の Sustainable Forestry : Philosophy, Science and Economics の 1 節を引用して、次の世代のために知識を共有し、共に協力する必要性を強調した。

## 2. フォーラム

フォーラムは5つのテーマが設定され、各々について話題提供者が講演し、2人のコメンテーターがコメントするという形で進められた。議長団は佐々木 恵彦 (日大教授, 元 CIFOR 理事), J. SAYER (CIFOR 所長), Gill SHEPHERD (英 ODA, CIFOR 理事会議長) の3人である。以下は話題提供者の話の要点である。

### (1) グローバリゼーション: 三橋規宏 (日本経済新聞, 論説副主幹)

マクロ政策の観点から、環境政策は財政・金融に次ぐ大きな問題。20世紀は木を痛めつけた100年であり、21世紀は何処まで再生できるか人類の運命がかかっている。気候変動・温暖化に対応しCO<sub>2</sub>を吸収する森の機能を活用しなければならない。提案①; 100年住宅作りの推進 (1億5千万トン程度の炭素が都市にあり、樹木の貯蔵庫となる)。提案②; 国産材の積極的利用 (高齢林を植え替え、若返らせる)。提案③; 木炭の有効活用 (エネルギー特別会計を作り、長期的に炭を備蓄することは21世紀に向けたエネルギー対策)。

コメンテーター: F. REIFSCHNEIDER (CIFOR 理事), Hans van GINKEL (国連大学学長)



写真 1 議長団と話題提供者

### (2) 社会公正: 田中由美子 (国際協力事業団, 国際協力専門員)

コミュニティフォレストリーにおいても、ようやく女性の役割や社会的弱者の問題に目が向けられるようになってきた。しかし現実には、まだ一部の人々や男性中心にプログラムが計画・実施され、女性の意向とか弱者のニーズが軽

視されてしまうことが多い。木を植えて育てることの大切さを最も良く知っているのは、水くみ、薪とりなどに多くの時間と労力を費やしている女性であり、彼女たちの意向こそ重視されなければならない。国際協力事業団がネパールの土壤保全局と共に実施している森林保全プロジェクトでは、女性たちのおかれた状況や森林とのかかわりを把握するための調査を行っている。いま途中段階だが、女性たちが予想以上に森林の保全に重要な役割を果たしていることがわかってきている。これらの結果をふまえながら、保全プログラムへの女性の参加を促すためのガイドラインを提示して行きたいと考えている。

コメンテーター：Gill SHEPHERD (CIFOR 理事), Percy SAJISE (CIFOR 理事)

### (3) 森の人々：Lini WOLLENBERG (CIFOR, プロジェクトリーダー)

森林に依存して暮らす人々の福祉の向上は、CIFOR の重要な研究課題の一つに位置づけられている。CIFOR ではその一環として、カリマンタンに設定されたブルガン (Bulungan) 試験林において、インドネシア政府の協力のもとに、土地の管理を地域住民の手にゆだねながら、森林の適切な利用と住民の生活の安定を両立させるやり方を見いだすための研究に着手している。30 万 ha におよぶこの試験林ではケニャ族、プナン族、ルンダエ・ダヤック族の人々が生活を営み、その数は 7,000 人から 10,000 人と推定されている。現在は基礎的情報を得るための社会調査を実施しているところだ。これは小規模な社会実験であるが、ブラジルやザイール、中国などで同じような取り組みを進める際の先行事例として貴重な情報を提供できるものと考えている。

コメンテーター：Jag MAINI (CIFOR 理事), 佐藤 仁 (東京大学教養学部)

### (4) 生物多様性：Jerry VANCLAY (CIFOR, プロジェクトリーダー)

CIFOR の多様性研究は、measuring (測定), mapping (地図化), managing (管理), monitoring (査察) の 4 項目からなる。多様性の評価は全ての生息域における査察をとおしてなされるべきだが難しい。我々は多様性を示す効果的な指標を探しており、その方策の 1 つは専門的な知識を持たない人によっても評価できる植物の特徴に依拠する手法である。保護区を何処に設置すればよいかという問題では、地理情報およびリモセン情報から指標を得る手法を探している。カリマンタンでは伝統的な地理情報システムの中の有用なデータを使ってキーとなる保全地域を決定するのが有効である。査察には 6 つの指標を使っている。その内の 1 つは、これは持続性の指標にもなるが、水の量と質である。これには 4 つの項目をモニターしているが、この方法は全ての場所でする必要はなく、与えられた条件のもとに簡単且つ適切な項目を選ぶ事が出来

る、実際的でお金のかからない方法である。

コメンテーター：藤森隆郎（森林総研森林環境部長），Madham GADGIL（CIFOR 理事）

(5) 持続性：小林 紀之（住友林業，グリーン環境室長）

インドネシア・カリマンタンで、7年間、熱帯林再生を試みている。フタバガキを主とする郷土樹種の再生は可能。1980年代初頭の山火事で消えてしまったオランウータンが森林再生とともに戻ってきた。試験地内の地元民の協力を得て社会林業を実践している。森林の維持・造成には山火事等の外からの攪乱に対する守りが必要で、公民教育、特に焼き畑対策を実施している。人類は火を持ったことで文明化した。火で危機に瀕しているといえる。化石燃料の大量消費による現代の危機はまさにそれである。今、壊滅的な山火事被害に遭遇しているが今後とも森林の再生のための活動を続ける。

コメンテーター：西谷嘉光（林野庁海外林業協力室長），Ronnie de Camino VELOZO（CIFOR 理事）

### 3. 総合討論および閉会式

総合討論では Dr. J. MAINI がこれからの林業の課題として、新しい認識に基づくフォレスターの教育・訓練の必要性に言及し、小林紀之氏は実務者と学生や研究者が一緒になって考察・協議することの重要性を強調した。その後、閉会式では ITTO（国際熱帯木材機関）の B.C.Y. FREEZAILAH 理事長が「未来への道；2000年を越えて」と題して講演した。最後は、CIFOR 理事である目黒依子上智大学教授が、フォーラムの目的が達成されたこと、今後の日本の関係者の CIFOR への支援が必要なことを述べ、フォーラム開催に尽力した関係者の労をねぎらって閉会の辞を締めくくった。

———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ————

この日の参加者は総計 206 人で、その内訳は CIFOR 関係者（24）、関係省庁（17）、国公立研究所（38）、大学（49）、林業・環境等団体（24）、JICA 等団体（11）、NGO（5）、民間（16）、プレス（4）、国際機関（8）、大使館（5）、その他（5）であった。CIFOR の理事およびスタッフ約 20 人は翌日から、井出光俊・林野庁国際研究連絡調整官、廣居忠量・森林総研企画調整部長、森貞和仁・森林総研立地評価研究室長および小林繁男 CIFOR 上級研究員の案内および前橋営林局の協力を得て、1泊2日の日程で日光周辺の林業地視察を行い、最終日の4月13日、森林総研、住友林業研究所およびつくば研究学園都市を見学した

後帰国した。

---

図書紹介

◎熱帯樹種の造林特性(1)~(3) (熱帯林造成技術テキスト No. 8~10) 森 徳典  
ほか編 A5版 (1)225 pp. 1996. 3刊;(2)277 pp. 1997. 3刊;(3)302 pp.  
1997. 12刊;(財)国際緑化推進センター, 領価各2,500円

熱帯林保全の重要性は木材資源の問題だけでなく、今や地球環境問題として全世界に認識されている。わが国も熱帯林の保全に関わる多くの活動を行って国際的にも貢献しつつある。熱帯林問題に取り組む場合、多様な熱帯樹種についての多くの知識を必要とする。特に熱帯林保全のためには、樹種の生理・生態的性質にもとづいた造林的取り扱いの知識が不可欠となる。すでに雑誌「熱帯林業」(旧, 新)では20数種の造林特性をシリーズで解説しているが、一部は最近の情報によって改訂し、さらに大幅に樹種をふやして、国際緑化推進センターの普及活動の一つとして、新たに3巻のシリーズにまとめられた。

集録された樹種は湿潤地帯から乾燥地帯を含む広範な熱帯地域の主要樹種で106樹種・群(83樹種, 16属, 7種類)に及ぶ。編集者や執筆者(42名)はいずれも熱帯林業の研究や協力事業に深い経験をもつ方々であり、本書の引用文献にもわが国研究者の業績がかなり見られるように、わが国の熱帯林研究と経験とが着実に蓄積されてきて解説の迫真性を高めているように感じられた。造林経験の多少による資料, 文献の精粗もあって解説項目は完全には統一されていないが、樹種の形態からはじまって、分布・開花結実・種子・育苗・植栽・適地・保育・天然更新・成長・病虫害・用途等の基本的特性にわたっている。とくに更新関係では苗木植栽だけでなく直播きや天然更新など実用的な技術にもふれた樹種が多いこと、樹種の生態的特性や適地がよく記述されていること、成長データがよく収集されていること、さらには育種など最新のデータも加えられていることなどがこれまでの類書に比較して目立っている。また病虫害の記述については特に熱帯病虫害の専門家の校閲を受けるなど誤りのないよう務めている。各巻に学名・一般名のくわしい索引があり、第3巻には1~2巻の索引も再掲されているが、慾をいえば全巻通しての索引があるとより便利かと思われた。ともあれ熱帯造林のテキストとしては、最もよくまとめられており、熱帯林関係者にとっての座右の書となると思われる。(蜂屋欣二)